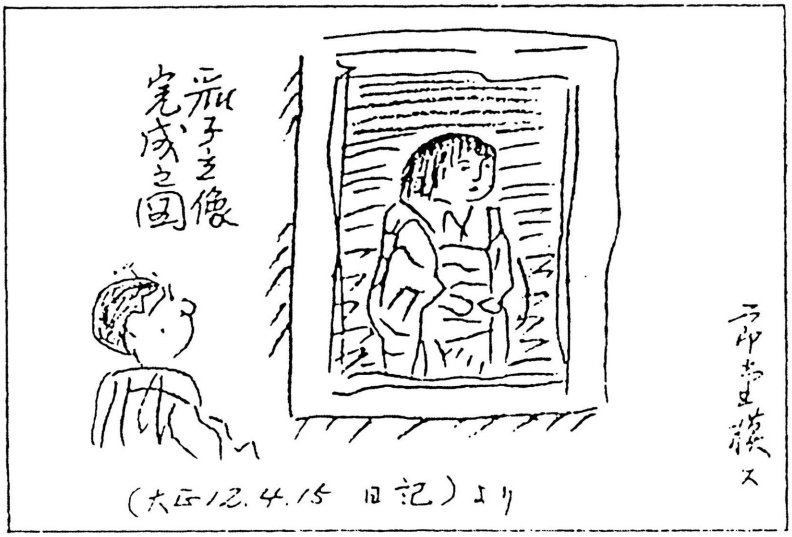
鶴沼

昭和六十年五月号
通巻第二十六号

はるばると桜貝と
海光るわが故里



鶴沼を語る会

国歌「君が代」の文句は

今のままでよいのか

富　士　　山（たかし）

過日万葉集を読んでいると、巻十四　―三四〇〇番に

信濃なる千曲の川の細石（さざれし）も

君し踏みては玉と拾はむ

というのがあった。昔の人は、人の魂はふんだ石にも、持っている品物にも、着ている着物などにも、ひろがりゆくと考えていた。

その一部の考えは今日でも我等の間に残っている。例えば肉親の死後七七忌がすむと、親類の人々がよって形見分けをする。

死んだ人の魂が生前持っていた品物にのり移っているという考えからであろう。

そこで巻十四―三四〇〇歌の原文を見ると

……知具麻能（チグマノ）　河珀能（カハノ）……

とあり、万葉時代では千曲川と濁って呼ばれたらしい。

細石　巻十四―三四〇〇の歌では字余りを防ぐために「さざれし」と呼んでいる。これは川にある小石のことである。

細石の起因。山の大石（巌）がくずれて川に落ち、細かく砕け、長年流水に洗われて角がとれ、丸味をおびてきたもので、現在川で見る小石がそれである。

細石の運命。今後も長く現在のように水に洗われつづけば表面は次第に溶け去り、形は次第に小さくなり、更に長年の後には細石の原形は全く失はれ消えて行くだろう。

細石の運命が右のようなものであるとすると、我々が永年歌って来た君が代の中に「さざれ、いしの……」とは何のことか、これまで学校でも教わらずに来たが、それが細石のことだとわかった。君が代は細石が長年たつと大岩（巌）になるというのであるが、これは自然現象とは全くちがったいい分である。

こんな歌が国歌として永らく色々の儀式に歌われて来たとは全くおかしなことである。

君が代の原歌らしいものを探したら、古今集（巻二〇―一〇八五）に

君が世は限りもあらじながはまの
まさごのかずはよみつくすとも

とあり、また後拾遺集に

君が代は千代に一度ゐるちりの
白雲にかかる山となるまで

とあり、つまりちりも積れば山となるということであろう。

さて、現在の君が代は多分明治の始めに作られたものと思うが、作者の名は不明である。

曲の方は初め英国人フェントンのものだったが、現行のものは宮内省式部寮が一八八〇年に作曲したとあるから、今から百五年前ということになる。

細石が何百年か何千年たつと巌になるという絶対にあり得ない反自然現象的な考えである。而も現在の我国を細石にたとえるならば何百年か何千年の後には亡びるということになる。　かかる歌が国歌として使われていたということはおかしい限りである。　今は適切な国歌を新作すべき時期と思う。

（昭和五十九年十二月　作）

―追補―

本日、古今集を読みますと、その三四三番（よみ人知らず）に「わが君は千代に八千代にさざれ石のいはほとなりて苔のむすまで」と出ているのを発見しました「わが君」を「君が代」と直したものと見えますが、いつの頃誰が直したものかはわかりませんが、このことを、先の原稿に是非御記入下され度

（昭和六十年四月七日夕刻記す）

（特別寄稿）

六代目尾上菊五郎との想い出

尾沢勝造（８７歳）

新橋で室内装飾織物商を営んでおりました私は、戦争が激しくなるにしたがって、商売もできなくなり、好きな釣で明け暮れする生活をしておりました。

その頃の境川は川底が見えるほど水がきれいで、うなぎ・はぜ・手長えびなどがとれ、食料不足の折から、それらの魚は貴重なものでした。

音羽屋は昭和十八年か十九年、それまで住んでおられた茅ヶ崎の自宅を失火で焼いてしまい、私の家のすぐ近く、境川の川岸に面した家（現在、藤が谷二ノ十ノ二、広瀬宅）に引越して来られました。

私が毎朝自分の和船でうなぎを捕っているのを、音羽屋が境橋の上から見ておられ、声を掛けられたのが、お近づきになるきっかけになりました。

音羽屋も大そう釣がお好きで、それからは好い天気の日には、毎日のように私の舟で釣に出かけるようになり、江の島の西浦あたりで鱚を四、五十匹ほど釣りました。

私は櫓を漕ぎながら片手で釣るので魚が釣れても手が離せず、どうしてもその都度、音羽屋に魚をはずして餌をつけてもらうという状態になり、

「これじゃ、まるで尾沢さんの手つだいに来たようだ」と笑いながらも、楽しんでおられました。音羽屋が十匹釣るうち、私は三十匹という風でした。

また、引潮の時には河口の水がなくなり、二人で舟を押して海へ出たことも再三ありました。

境川では、うなぎがたくさん捕れるので、私は毎朝、三時から四時には、前日に仕掛けた縄を上げに行き、捕れたうなぎを、川岸の音羽屋の庭先から届けました。音羽屋は初めのうちは、中位（五～六十匁）のうなぎを好まれましたが、大きい方がおいしいと勧めると、それからは百匁位のを好むようになりました。

お酒好きの音羽屋は、やはり酒好きの私をよく夕食に呼んで下さり、一緒に御馳走になりました。音羽屋の家に弟子たちが集まって一杯やると、きまって釣の話になり、そういう時には、三十匹の魚が五十匹になり、小さい魚も大きくなり、

「なッ、尾沢さん、そうだったよなっ」

と、相づちを求められたりしました。

二人で行った海では、こわいことが二度ありました。一つは櫓綱が切れてしまったとき、もう一度は、江の島沖から帰る時、岸辺近くで潮の流れが変って、いくら漕いでも舟が進まず、大変難儀をしました。その時は岸にいた人が、もっと沖をまわれと手招ぎをして教えてくれ、云われた通り遠まわりをして、や

っと難を逃れ、帰ることができました。その時は、私自身真青になっているのがよくわかり、必死でした。そんな時、音羽屋は、

「わたしは泳げるから平気だ」などと言って、平気を装い、私を落着かせようと気を遣われる方でした。そのことがあってからは、私もこわくなり、大切なお身体の方ゆえ、それからは、行きつけの腰越の船頭「八」という人を頼んで一緒に行くようになりました。

音羽屋は、いつも人の動作を注意深く見ていて、すぐに覚え、その場で真似てみせるという心からの芸人でした。例えば、櫓の漕ぎ方、船のあやつり方、また、酔っぱらいの歩き方などは絶品でした。

音羽屋が船を造ったのは、終戦後、進駐軍の誰かからモーターを譲ってもらい、それで造ったと記憶しています。尾上菊五郎の本名の「寺島宏三」の宏の字をとって「菊宏丸」と名付けました。船首がすっとのびて、そこに菊の模様と船名が彫られた、姿のよい立派な船でした。しかし、音羽屋はこの船にいくらも乗らないうちに、世の中もおさまり、遊んでいられなくなりました。

昭和二十三年、東京に家を建てられて引越して行かれました。

音羽屋は東京へ移ってからも、たびたび私声をかけて下さり、築地の家へ泊まりがけで、品川のお台場へ、かいず（黒鯛の二年もの）釣に行きました。

芝居が始まると、二日目位に必ずよんで下

さり、家族共ども楽しませていただきました。
私は楽屋へもよくまいり、菊五郎が舞台化粧をする様子を傍で見させていただきました。
音羽屋は、舞台化粧の隈取りをしながらも、
「え？尾沢さん、それから何が釣れた？」
とつりの話に興じていられた。
音羽屋は糖尿病で、医者から酒を控えるように言われていましたが、私を呼んでは一緒に飲み、千代夫人が、
「こちらがあなたの分、こちらは尾沢さん」
と徳利を別にして置いていかれるのに、音羽屋は自分のが無くなると、私のと取り替え、奥さんに
「尾沢さんの酒がないよ」
と言って持って来させてはよく飲みました。

私が最後に音羽屋にお会いしたのは、亡くなられる十二、三日前だったと記憶しております。
昭和二十四年七月、音羽屋は六十四歳でこの世を去られました。
誠に掛け替えのない役者であり、私の生涯で最も尊敬した友人として、その時の悲しみは、今も鮮明に想い出されます。
短かいお付き合いでしたが、大変お世話になりました。私の人生の中で、一番の宝話でございます。

―― 終 ――

（昭和六〇・二・二〇原稿受付）

十一代目團十郎のこと

田中まさ子

昭和四十年の初秋の頃であったと思う。

新聞は、十一代団十郎が新橋の慈恵医大へ入院し、その大学のロビーで記者会見が行なわれると報道した。当時一番の人気役者のことをとてテレビにうつされるのを見た。

相変らず、すっきりとした中高の顔、結城つむぎの和服、まことによい役者ぶりであるがオヤッと思った。すっかり痩せているのに気がついた。

わたしは倅に言った。

「団十郎が入院いてるなら見舞に行きたいがどこの部屋なの？」と聞いた。　倅は当時、慈恵医大の外科にいたから簡単に会えると思った。倅は私の問いに対して、とてもけわしい顔をして「駄目だよ、誰が行っても会えないよ」とにべもなく答えた。私はその顔を見て、ああそうかと胸にしみた。

どこの病院の医師でも、患者のことは決して他人にはしゃべらないものだ。まして家庭には持ち込まない。これは悪い病気なのだなと黙ってしまった。

それからしばらくして団十郎の死が報ぜられた。

あの美しい錦絵に見るような役者ぶりも、さわやかな口跡もすっかり持って、秋雲にの

り旅立って了った。

助六、勧進帳の弁慶も、富樫も、源氏物語の光の君も、みんな今でも頭に残っている。

私があんまりがっかりいているのを倅が見て、

「団十郎の具合のよい時に、僕のおふくろはあなたの大フアンですよ、と言ったら、団十郎は床にきちんと座り直して『さよでございますか、有難く存じます』といわれたよ」

と話してくれた。

病院では模範的な患者で医者の言葉を真面目に信じ礼儀の正しい人であったという。

時に昭和四十年十一月十日、晩秋の空はさむく曇っていた。名優は若く美しいまま去っていった。

さて、今年は二十年ぶりに歌舞伎界の最高の名跡十二代市川団十郎の誕生を見ることとなった。よくも私は生きて来たことよと思う。

私が歌舞伎に引かれるのはこの社会が、家・名・芸を大切にするにある。

役者は幼い時から自分の身体で凡て覚え込まされる。理くつではない、学でもない。

評価はお客さまがしてくれる。名門の子が大根(だいこん)であってはならないのだ。

老婆心に過ぎないが、国の伝統的な芸を背負ってゆく十二代団十郎襲名に期待すること大である。早く両親を亡くされた夏雄さん一生懸命にがん張ってくれると楽しみである。

（昭和六十年三月十五日）

鵠沼の文人たちとその旧居

岸田劉生

伊藤節堂

1、劉生の旧居を訪ねる

昭和二十七年五月六日のことである。

「鵠沼を語る会」の集合が始まる前に、私は元ライオン堂薬局の主人斉藤巧一さんに、

「失礼なことを伺います。当時　岸田劉生の住んでいた家が、たしかここにあったと、はっきり覚えておられますか」

「そりゃあもう、あの当時のことはいまでも、目に見えてきますよ」

「そうですが、あとで私をそこへ連れていってくれませんか」

「いいですよ、そんなに遠くはありませんから」

集会が終わるとすぐ、私は斉藤さんとでかけた。

斉藤さんは土地の人で関東大震災の前から鵠沼に住んで当時は薬種商を営んでいた。

当時、別荘地として脚光を浴びた鵠沼海岸一帯は、砂山の松林の中に点々と住宅が散らばり、静かなただずまいを見せていた。

その別荘へ斉藤さんは毎日のようにご用ききに歩いたという。

さて私たちは鵠沼海岸駅の南側踏切からまっすぐ湘南学園への通りに出た。

「この辺りはほとんど松林で、ポツンポツンと家が建っているくらいでした。」

と語る斉藤さんは、踏切から二〇〇ｍも来たところで急に立ち止まり、

「この辺りで、岸田さんが絵を描いていましたなあ」と、感慨深げにいいながら、劉生が写生をしていた高さに身をかがめて前を見た。

「ここから岸田さんの二階の屋根が見えたんですよ、つきあたりの庭木なんかも今ほど背が高くありませんでしたからね」

私たちが歩いているこの道路は前方80ｍぐらいのところで筋かえになっていて。ちょっと曲がってから湘南学園へ向かうのである。

二、ここからが松本別荘

その曲がりから先が、鵠沼松が岡四丁目八番だが、斉藤さんは四丁目八の９と八の１０の境の低い石垣を見て、

「ここからが松本別荘でした」

といった。

当時松本別荘というのは、松本氏本人の別荘と、同氏が所有地内に建てた数軒の貸し別荘をいうのであった。

松が岡四丁目八番と七番との間はやや広い通りになっているが、斉藤さんは七番地の角のあたりを見ると

「あ！　ここですよ、岸田さんとこは、たしかここのお庭に青桐が一本あったんですがね。あ！　ありました。青桐が大きくなっていますね。あのころはまだこれ位でしたよ」

といいながら、両手の親指と人差し指で輪を作って見せた。

その大きさでは、およそ風呂の煙突ぐらいだが、今塀越しに見える青桐は、ほぼ電柱ぐらいの大きさに見えた。

大正十二年の震災に遭った劉生がここを去って以来、人も変わり建物もかわってしまったけれども、この青桐だけは変わっていないのである。そこは四丁目七番地１０号であった。

松本別荘と書かれた門柱は、今の四丁目七番地の角と八番地角に立っていたという。その門を入ると松本氏の私道で、両側に貸し別荘、まっすぐつき当たった砂山に松本氏自身の別荘があった。

当時を懐かしむ斎藤さんが下のような略図を書いてくれた。

三、劉生　生まれる

岸田劉生は明治２４年(1891)６月２３日当時の先覚的ジャーナリストであった岸田吟香の四男として、東京銀座二丁目十番地に生まれた。そして劉生と名づけられた。

やがて、東京高等師範附属小学校に入学、つづいて附属中学校へ進むのであるが、絵画に専心したいということで、中学三年修了をもって退学した。

明治４１年(1908)白馬会葵橋洋画研究所に入り、黒田清輝に師事して外光派を学んだ。

そして二年後の明治四十三年には第四回文展に「馬小屋」「若杉」の二点が入選した。弱冠十九才であった。

四、劉生と「白樺」

武者小路らが「白樺」を創刊したのは、四十三年四月であるが、劉生が初めて「白樺」を読むのは、翌年四十四年の三月であった。

劉生は「白樺」を読んで武者小路の文章にいたく感動し、以後「白樺」の愛読者になる。

しかし劉生が「白樺」の同人となって武者小路と親交を結ぶようになるのは、四十四年十二月のことであった。

大正二年(1913)七月小林蓁(しげる)と結婚、翌三年三月代々木山谷に新居を持ち、四月十日には長女麗子が生まれた。

大正五年(1916)九月、結核の診断を受けた劉生は、療養のため東京府荏原郡駒沢村に転居した。

五、劉生鵠沼へ移る

駒沢村に移った劉生はわずか五ヶ月しかおらず、大正六年二月二十二日には鵠沼の佐藤別荘へ移った。

このとき劉生二十六才妻蓁二十五才、長女麗子三才（満年齢）であった。

佐藤別荘は今はないが、塩沢務所蔵の藤沢町地図（大正十五・六調製）によると、鵠沼字下藤ケ谷七三六五―二〇で、別名を芳藤園

といった。現在の住居表示では松が岡２丁目１番地に相当する。
（佐藤別荘というのは、佐藤氏本人の別荘以外に、貸家として建てられたいわゆる貸し別荘を指すのである）。

６、松本別荘へ引越す

佐藤別荘に移り住んで４か月になった劉生は、画を描くのに光線の具合が　悪かったので、アトリエにぴったりの洋館のついた松本別荘へ移ることにした。大正６年（1917）６月であった。

松本別荘というのは、当時の鵠沼下岡六七三二番地一三号であった（土方定一による）。

娘麗子が後年（昭37）に出版した「父岸田劉生」によると、

『正面の小高い松林の中に大きな邸宅があった。入口には大きな門柱があって「松本別荘」と表札がでていた。

門から奥の方へずっと道ができていて、その両側の松林の中に点々と貸し別荘があった。劉生の借りた家は門柱のすぐ右の家であった。

どの家も三間（みま）か四間（よま）の手頃の家の中で、劉生の家だけが、母屋のほかに洋館二階建ての一棟がついていた。洋館の一階が画室で、二階は書斎兼居間兼、劉生の寝室であった』。

こうして、狭いながらも、はじめて洋間のアトリエをもつことができた劉生は、鵠沼の環境が大いに気にいり、健康も急速に回復して、麗子像はじめ数々の名作をこのアトリエから生み出すのである。

七、劉生鵠沼を去る

大正十二年九月一日、関東大地震で劉生の家は母屋がペチャンコに潰れ、洋館は階段が落ちた。九月七日の朝片瀬の写真屋が寄ったので、劉生らは潰れた家の屋根に上がって写真を撮らした。

劉生一家は一時名古屋に住むことになり、

九月十六日鵠沼を離れるのであるが、足かけ七年の間鵠沼で描いた麗子像は実に三〇点に及ぶのである。

時移り人かわり、劉生は昭和四年十二月二十日三十八歳で急逝し、娘麗子も昭和三十七年にこの世を去った。

鵠沼は劉生の生涯において最も充実した時代であったが、それは描かれた麗子像とともに永遠に消えることはない。

（完）

あとがき

岸田劉生は優れた画家であるばかりでなく、文筆家でもあり評論家であった。因みにこれまでに出版された著書はつぎの十一種類、十三冊に及ぶのである。

1、岸田劉生画集及芸術観　大正9　聚英閣
2、図画教育論　〃14　改造社
3、初期肉筆浮世絵　大正15　岩波書店
4、演劇美論　〃5　刀江書店
5、美乃本体　〃16　河出書房
6、宋元の写生画　〃23　全国書房
7、鵠沼日記　〃23　建設社
8、芸術と人生についての手記　〃23　永言社
9、劉生絵日記（全3巻）　〃27　竜星閣
10、新古細工銀座通　〃34　東峰書店
11、浮世絵版画の画工たち　〃51　東出版

このなかで、「鵠沼日記」は大正九年一月、劉生が数え年三十才になったことから、日記をつけようと思い立ち、一年間休みなく書き綴ったものである。

さらに、翌十年以降も書きつづけ、十四年七月まで五年七ヵ月にわたり、一日も休まず日記をつけた。

大正十一年、十二年、十三年の三冊が「劉生絵日記」である。一読をお奨めする。

（昭和60・4・17記）

	画題	製作年月	大きさ	その他
1	「麗子五歳之像」	1918大正7・10・8	油彩 45.3×38.0	第六回草土社展 東京国立近代美術館蔵
2	「麗子六歳之像」（毛糸の肩掛したる麗子）	1919〃8・3・7	水彩 41.4×32.0	個展
3	「麗子像」	〃〃8・3・19	木炭淡彩 37.2×27.8	左向き、リンゴを持つ
4	「麗子像」	〃〃8・4・21	コンテ 37.5×30.0	右向き、毛糸の肩掛する
5	「麗子坐像」（絞りの着物）	〃〃8・8・23	油彩20号	第七回草土社展
6	「麗子像」	〃〃8・	素描淡彩	第七回草土社展
7	「麗　子」	〃〃8・	素描淡彩	
8	「麗子坐像」	1920〃9・1・28	水彩 33.2×46.5	横位置左手に京人形持つ ブリジストン美術館蔵
9	「麗子坐像」	〃〃9・2・3	水彩 33.0×45.0	横位置両手を膝におく 水彩素画個展
10	「麗子立像」	〃〃9・	水彩	水彩素画個展

11	「麗子之像」	1920大正9・	素描淡彩		水彩素画個展
12	「麗子坐像」（麗子肖像）	〃 9・	素描淡彩		
13	「麗子裸像」	〃 9・8・31	水彩	49.5×33.0	第八回草土社展
14	「肩掛麗子（麗子坐像）」	〃 9・	素描淡彩		
15	「麗子微笑之立像（麗子立像）」	1921 〃 10・4・3	水彩	50.8×34.3	第二回流逸荘個展
16	「童女像（麗子花もてる）」	〃 10・9・27	油彩	52.5×45.0	第三回帝展
17	「麗子洋装之図」	〃 10・9・30	水彩10号大		第二回流逸荘個展
18	「麗子微笑」	〃 10・10・15	油彩	44.5×36・8	第二回流逸荘個展 東京国立博物館蔵 昭和56・11・27六十円切手発行
19	「麗子坐像（紫色毛糸洋服着たる麗子坐像）」	〃 10・11・1	水彩	51.4×34.6	第二回流逸荘個展
20	「麗子八才之像」	〃 10	油彩	39.5×34.0	
21	「麗子住吉詣之立像（麗子肖像）」	1922 〃 11・2・20	油彩	80.3×60.5	野島邸個展 昭和48・4・20二十円切手発行
22	「二人麗子飾髪図（童女飾髪図）」	〃 11・3・21 〃 11・3・30	油彩	90.7×72.6	野島邸個展
23	「麗子微笑」	〃 11	水彩	32.6×24.6	
24	「麗子微笑」	〃 11	水彩	32.0×23.0	野島邸個展
25	「麗子微笑」（麗子肖像）		油彩		

26	「麗子像」	1922大正11・5・30	水彩4号大		大正14・1・14 加筆 第九回草土社展 大正11・5・20 加筆 野島邸個展 第1回春陽会展
27	「麗子之像（麗子正面肖像）」	〃 11・11・2	油彩	44.8×37.3	
28	「野童女像（麗子嬉笑図）」	〃 11・4・22	油彩	65.0×53.0	
29	「麗子弾弦図」	1923 〃 12・1・28	油彩	41.0×32.0	
30	「童女図（麗子立像）」	〃 12・4・15	油彩	53.2×45.5	

（注）これは大正七年夏、麗子が初めて油絵のモデルになってから、大正十二年九月、一家が鵠沼を去るまでのものであるが、鵠沼を去ってからもなお四点の「麗子像」が描かれていることをここに付け加える。

（文献）

岸田劉生著　「鵠沼日記」　建設社
〃　「劉生絵日記」第一・二巻　竜星閣
土方定一著　「岸田劉生」　日動出版部
東珠樹（あずまたまき）著　「岸田劉生」　中央公論美術出版
〃　「岸田劉生」（椿貞雄の回想から）雪華社
集英社　「現代日本美術全集・岸田劉生」
講談社　「日本近代文学大事典」第一巻
筑摩書房　「近代日本文学大系―武者小路実篤集」

鵠　沼　昭和６０年５月号
通 巻 第 ２ ６ 号

昭和６０年５月１４日発行
編 集・鵠 沼 を 語 る 会

藤沢市鵠沼海岸２－１０－３４
鵠 沼 公 民 館 内
電話３３－２００１、２００２